

2023 年度 9 月入学 修士課程一般入学試験・国費留学生等入学試験・学内選抜入学試験（第 2 回）

2024 年度 4 月入学 修士課程学内選抜入学試験（第 1 回）・海外指定大学特別選考  
事前課題

課題文を読んで、2500 字から 3000 字程度で設問に答えなさい。その際、資料や文献を参照し、それらを明記すること。参考文献や引用文献等のリストも上記文字数に含みません。

### 設問

課題文では「優れた授業を観察し、まねることは基本であるが、文化学習としての「まね」でなければならない」と述べています。その理由について、筆者の考えをまとめたうえで、日本語教育における「よい授業」とは何かということについてあなたの考えを述べなさい。

## 課題文

教える技術と思い込み

それぞれの教師にとつての「教える技術」は経験を重ねることにより構築されるかもしれない。しかしながら、それがそのまま万人にとつて有効な「教える技術」であるという保証はどこにもない。学習者の興味・関心や学習スタイル、英語力や英語学習の経験などは、常に変動的なものであるからだ。もちろん、ある程度の一般化は見いだせるかもしれないが、それをそのまま受け入れることは、目の前の学習者から目をそらし、「よい授業」の成立自体が目的化されてしまう。

「文化的学習としてのまね」

「優れた授業」を観察し、自らの教育実践に取り入れることは決して悪いことではない。あらゆる学習と同様に、「まねること」は基本であるからだ。ただし、ここで言う「まね」は、「文化的学習としてのまね」でなければならない。佐伯（一九九五）によれば、『学ぶ』ということばは、もともと『まねて、すること』だといわれている（同八三ページ）そうである。佐伯はトマセロら（Tomasello et al. 1993）の提唱した「文化的学習（cultural learning）」論をひきつつ、「文化的学習としてのまね」の特徴を次のように述べている。

文化的学習としてのまねというのは、他者の行為の外側（見かけ）を自分自身の行為として再現するのではなく、他者の「内側」に入り込んで、いわば、その人の身に「なって」、その人の目的や動機を自分の中に取り込み、その上でその人の置かれている状況に対して「その人として」自然な、当然な、妥当な行為をするという、結果として「まねた」ことになっているのである。（佐伯 一九九五、九〇ページ）

文化的学習としてのまねに対し、「たんに『見よう見まねで』類似の行動をしたり、注意を喚起されて結果的に同じことができるようになる」（同八七ページ）ことは、「社会的学習」としてのまね、である。単純に授業のまねをするのではなく、自分なりに消化して創造へとつなげる文化的学習としてのまねであれば、他人の授業を見ることによって得られるものは少なくない。自らの目の前にいる学習者たちの置かれている状況や環境を考慮することなしに、教え方の技術だけを「まね」することが問題なのである。

「よい授業」を見ることにより、自らの教育実践に行き詰っている英語教師であれば、「教える技術」が存在し、それをそのまままねることで、改善されるという思いに駆られやすい。ところが、実際にはなかなか思うようにはいかない。教師の個性も学習者の個性も違うため、「見よう見まねで」やったところで、「よい授業」になるとは限らないのだ。さらに、次に述べるよう

に、いわゆる研究授業のように公開されている授業は、その当日に向けて、英語教師だけではなく学習者も「練習」を積んでおり、いわば「演劇」として完成された授業であることが少なくない。

### 「演劇」としての「よい授業」

以前、中学校の英語教育の現場において、次のような出来事があった。教科書の本文は、ネパールの少年が、近隣に学校がなく、また貧困のために学校に行くことができないという内容であった。授業の後半では、「ネパールの少年たちに、何ができるだろうか」を英語で書く、というタスクがあった。英語教師は、「あなたの思った通りに書いていい」と声をかける。少し間があった後、学習者たちはいっせいに英文を書き始めた。

学習者たちがタスクに取り組む間、筆者は机間巡視をしていた。手が止まり、なかなか書けない学習者もいたが、多くの学習者がすらすらと英文を書いていった。ところが、学習者たちの書いていた英文は、ほとんど同じであった。黒板には、大きく「今日のポイント」として「It is a boy's dream to go to school.」(学習者の使っていたプリントにも「今日のポイント」を書き込むスペースが設けられていた)。つまり、言語表現においても内容に関しても、あらかじめ学習者に書かせたい英文が想定されていた、ということである。ちなみに、この授業のテーマは「英文を読み、自分の意見・感想を英語で伝えよう」というものであった。

念のために断っておくが、授業全体としては、おそらく「よい授業」と類されるものであった。公開授業の後に設けられた、英語教師どうしの意見交換の場において、「生徒の目がキラキラしていた」や「生徒が生き生きと授業に参加していた」といった意見が目立った。確かに、その題材で扱うべき言語材料は、学習者にとって分かりやすく取り上げられていただけではなく、彼らは言語活動に積極的に参加していた。しかし、この「よい授業」を見ていた時の、筆者の違和感はいったどこから来たのだろうか。おそらくそれは、英語教師と学習者との三人称的な関係性に対する違和感にあるのだろう。あるいは、公開授業を見たあとの「自由な意見交換」において、予定調和の発言が多く見られたことにあるのかもしれない。もしそうであれば、教師と学習者による「授業」だけではなく、自由討論の場までを含めて、まるで一つの「演劇」であるかのように、公開授業が行われているのである。

この授業の英語教師にとって、学習者は「英語を身につけさせるべき対象」であり、その「成長」を見守るべき「観察の対象」である。もちろん、それ自体は間違っていない。教育現場であるかぎり、学習者が学習事項を身につけられるようにする工夫や、学習者の定着度を評価することは当然のことである。

ただ、それだけでよいだろうか。「自分の意見・感想を英語で伝えよう」ということが目標であるならば、学習者たちは文字通り、自分の意見や感想を自由に書いてよいはずである。ところが上記の授業における「自分の意見・感想を英語で伝えよう」という言語活動では、「今日のポイント」である言語表現を機械的にあてはめることが前提となっている。

自分の意見や感想を、学習者たちがいきなり英語で書くことは難しいことは理解できる。しかしながら、意見や感想の中身については自由であってよいはずである。例えば、学校生活に悩んでいる学習者であれば、「学校に行かなくてよいのだから、うらやましい」と思うかもしれない。これをそのまま英語にしようとも、「今日のポイント」である「It is ~ for 人 to 動詞の原型」を使わないかもしれない。仮に今日のポイントである言語表現を使わせるのであれば、少し日本語の発想を変える必要がある。このようなプロセスは、学習者にとっては容易ではなく、したがって、教師との対話が自然に生まれる（「どうやって英語にするの？」）「どういう日本語のほうが英語にしやすい？」など）。学習者の立場になって（親密な自己投入）、「英文を読み、自分の意見・感想を英語で伝えよう」という力や態度を伸ばしたのであれば、教師が学習者の用いる言語表現やその内容までコントロールすることは矛盾するはずである。

このような感想を抱いた公開授業は、一度や二度ではない。口頭でのコミュニケーション活動を中心とした公開授業においても、同様である。「英語の授業を見た」というよりは、「英語の授業の演劇を見た」という印象を持って、帰路につくことが少なくない。

仲潔（二〇一七）「授業を演劇化する「教える技術」…英語教育者は学習者とどう向き合うのか」、佐藤慎司・佐伯胖（編）『かわることば 参加し対話する教育・研究へのいざない』東京

大学出版会, pp. 143-161（抜粋部分は 146-150）